

シャトルバスをきっかけに、広がったつながり

2020年ごろから京都大原記念病院グループのサービス利用が始まり、介護老人保健施設 博寿苑・京都大原記念病院・特別養護老人ホーム 大原ホームを利用してお母さま（享年107歳）を看取られたT氏。シャトルバスをきっかけに生まれた出会いや看取りまで、過ごした日々を聞かせていただきました。



大原ホーム 家族の会にて お母さま・T様

2025年8月、ショートステイ利用中に京都大原記念病院に入院。そこからシャトルバスを利用して大原まで通う生活がスタートしました。入院中、母の今後の話をする中で、母の身体機能や私の介護負担を考えると、「これまでのような在宅生活に戻ることは難しいのでは…」と告げられました。

揺れる思いの中での決断

「家で看取りたい」という想いを抱きながらも、これからの介護を現実的に考え、苦渋の決断で大原ホームへの入所を希望することに。

支えとなった人たちとの出会い

その決断を支えたのは、病棟職員や病院の医療ソーシャルワーカー、施設職員、そしてシャトルバスで出会ったご家族など多くの人たちの言葉。T氏は、「同じ立場だからこそ、分かりあえる事がたくさんありました。」と振り返ります。

片道30分のバスの移動時間は、同じように家族の介護を担っている方々と悩みや心配話を話したり、情報交換をしたり、時には笑い合い、涙ぐむこともありました。連絡先を交換し、時間をとって話し合うなど個人的な繋がりに発展した方もいました。

大原ホームに入所後も職員と相談しながら、ほぼ毎日、シャトルバスでの面会で母を支える日々でした。そしてホームでの最期の時にはT氏も立ち会うことができました。

「母の安らかな看取りに立ち会えた事が、私自身のこれからの大きな支えになると思います」。母との大切な時間を終えた今も、介護を通して出会った人たちとの縁は続いています。



大原ホームにて T様・お母さま・職員と



京都大原記念病院 玄関にて

介護の時間を支えた、かけがえのない出会い

介護の先に残った「人とのつながり」

「シャトルバスに乗った事によって得られた人との貴重なつながりを、これからも大切にしていきたいです。」介護のために乗ったシャトルバス。その先にあつたのは、悩みを分かち合い、支え合える人たちとの出会い。そして母との大切な時間を生き抜いたその先の「これから」。T氏からは、「雨の日も風の日も、毎日運転して下さった運転手さんに心から感謝いたします。」と。一人で抱えていた介護が、人とつながる事で、誰かと支え合う時間へと変わっていったT氏の経験は、「誰かとつながること」の大切さを教えてくれます。

T氏と支援に関わった皆さん

～京都大原記念病院・博寿苑・大原ホーム～

